せんそうは二度としない

那覇市立天久小学校三年　知念　慶

「ほうちょうをもっているのは、お母さんなんだってよ。」
ぼくは、読谷村のユンタンザミュージアムのジオラマの前でそう聞いておどろきました。どうしてかと言うと、ぼくはほうちょうをにぎって女の人にむけているのは、へいたいなのかと思っていたからです。だからぼくは、姉にむかって言いました。
「この人がお母さんってありえないんじゃない。だってお母さんが自分の子どもをころすはずないじゃん。」
すると姉はせつめいをくわしくよみながら教えてくれました。
「このお姉さんが、アメリカへいにころされるくらいならお母さんの手でころしてってたのんだと書いてるよ。」
「えっ。」
ぼくはびっくりしすぎて言葉がでませんでした。もう一度、よくお姉さんとお母さんの顔を見ました。お姉さんの目からはなみだがながれていて、お母さんはおにのように、こわい顔をしていました。
「せんそうになると、かぞくでもころしあうんだ。」
ぼくは、かなしくてむねがくるしくなりました。だからお母さんのところにいって、手をにぎりました。そして、ぜったいにせんそうはしたくない、と思いました。

チビチリガマでは、このジオラマのかぞくのように八十三人もの人がいのちをおとしたそうです。そしてその中にはぼくのような子どもが多くいたとしりました。
「チビチリガマに行って手をあわせてこよう。」
お母さんがいいました。ぼくも、そうした方がいいと思いました。
チビチリガマは、森の中にありました。きゅうなかいだんをおりていくと、大きなガジュマルの木にかこまれたガマをみつけました。ガマの入口はひくくて、中はまっくらでよくみえませんでした。こんなにくらいところにかくれて生活して、そうぞうするだけでとてもこわくなりました。さっきのジオラマの家ぞくのことを思いだし、もっともっとこわくなりました。ガマのとなりには、大きなおはかがたっていました。その中にはくやしそうな顔をしたおじぞうさまもいました。せんそうがなければ、家ぞくでしあわせにくらせたのに。せんそうがなければ子どもたちも楽しくあそべたのに。そう言っているようでした。ぼくはおはかの前に立って手を合わせました。
「天国では家ぞくでしあわせにくらしてください。せんそうはしません。」
ぼくは、チビチリガマのことをしって、かぞくがしあわせではなくなるせんそうを二度としないとちかいました。そして、家ぞくとわらったり、友だちとあそんだりできる、平和な世界になりますようにといのりました。